

【平成29年度 校内研究のまとめ】

◇研究主題◇

主体的に考える児童の育成

～国語科における協働的な学習を通して～

1 研究内容について

(1) 協働的な学習における各学年の取組み

	1回目	2回目
	1年	
提案した手だて	①主発問を二つに絞った ②交流する場面を位置付けた	①発問を絞った ②交流する場面を位置付けた
効果	①本時の場面の様子や登場人物の気持ちをじっくりと考えてまとめることができた。 ②ペア学習→全体発表により、自分以外の考えに気付いたり、更に想像を広げたりすることができた。	①主人公のスイミーに自分を置き換え、自分が選択した生き物への思いについて想像を膨らませて表現することができた。 ②ペア学習→全体発表により、自分以外の考えに気付いたり、更に想像を広げたりすることができた。
反省点	・児童の考えを構造化し、視覚的に捉えさせる板書を工夫したい。	・児童の考えを見取りを短時間で適切に行うことが不十分だった。
	2年	
提案した手だて	①ワークシートの活用 ②全体交流活動の工夫	・ワークシートを活用し考えを交流する活動を位置付ける
効果	①場面ごとに整理して読み取ることができた。 ②グループ活動をした上で全体交流の場を設けたので、苦手な児童も話すことができた。	・大事なことに気付かせて読み、内容を正しく読み取るのに有効であった。
反省点	・同じ考えを強調してしまった点があり、違う考えも取り上げるとさらに深められた。	・全体交流で、共通理解が弱かった。理由について自分の言葉で話させたり、ペア学習を取り入れたりできるとさらに深まったと考える。
	3年	
提案した手だて	・自分の考えや根拠を筋道を立てて話すために、掲示物を工夫する。	・机間指導を生かし、意図的指名をする。

効果	<ul style="list-style-type: none"> 感想の着目点が似ているグループに分け、意見の根拠となることが言えるようにした。その際には、段落ごとに要約した文が一目で見られる掲示物を用意し、根拠を文中の言葉から探しやすくした。 	<ul style="list-style-type: none"> グループごとの感想を、文の部分的な内容に基づくものから、筆者の中心的意図に関わるものの順に並べて掲示したり、考えが深まっている児童の意見を発表させ、他児童に広げた。
反省点	グループでの話し合いの手順を明確にしていなかったので、話し合うなかで、本来の感想からずれてしまったグループがあった。	
4年		
提案した手だて	<ul style="list-style-type: none"> 友達が書いたものを読み付箋に書いたコメントをプリントに貼付し友達からのコメントを読み感想を書かせることで自分の考えをさらに深めたり広げたりする手だてを講じた。 	<ul style="list-style-type: none"> 付箋を活用し、付箋に書いた自分の考えを出し合い模造紙に張りながら自分の考えや友達のを話し合った。そこから、同じ考えや似ている考えをひとまとまりにして、新しい言葉にするという活動。
効果	<ul style="list-style-type: none"> グループ形式ではなく、席は動かさず自分が動いているいろいろな人の考えを読むことができたので、考えを広げるには効果があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 出し合った付箋を基にイメージを広げ、別の新しい言葉へとつげる効果があった。
反省点	<ul style="list-style-type: none"> 友達の考えを知り、それに対して付箋にコメントを書く場面では、友達の疑問にどのようなコメントを書いたら良いのか悩んでいる児童も多く、「私もそう思います。」「同じ考えです。」など、賛同するだけのコメントも見られ、そこから考えを深めるには至っていなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 同じ考えや似ている考えをひとまとまりにして、新しい言葉を考えるのに時間がかかってしまったので、内容の精選が必要。
5年		
提案した手だて	<ul style="list-style-type: none"> 付箋を活用して考えをまとめさせる手だて 	<ul style="list-style-type: none"> ジグソー学習
効果	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動で似ている言葉同士を分類させ、重要度の高いほうから三つ選ばせることで、より書き手の意図が反映された言葉に気付くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ジグソー学習のプロセスを踏むことで、自分の意見を明確にするだけでなく、他グループの意見にも気付いて想像を広げることができた。
反省点	<ul style="list-style-type: none"> 「同じもの」「似ているもの」という視点を与えてしまっていたために、「他とは違うもの」という逆の視点から考えさせることができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材の特性に合った読み取りの観点を設定する必要があった。

6年		
提案した手だて	・登場人物毎に色分けされた付箋を活用して意見交流をさせた。	・これまでに見られた互いの意見を引き出し合う言葉を掲示しておき、協働する姿を具体的にイメージできるようにした。
効果	・色分けすることで、クルルとカララのどちらの視点から考えた根拠であるか一目で分かるようになった。発表し、話し合いを進める際に、自分たちの意見の偏りに気づき、「クルルの方も考えてみよう」と両方の視点から課題について考えようとする様子が見られた。	・児童はどのような言葉を使って協働していけばよいのか具体的にイメージすることができた。また、掲示物に残すことで、教師が継続して協働する姿を意識して指導することにもつながった。
反省点	・付箋を活用した集約と分類のさせ方が曖昧だったために、互いの意見の違いについて考えを広げたり、深め合ったりする姿が見られなかった。	・より多くの授業で活用し、継続的に児童に力をつけていくこと。

(2) 今年度の研究授業から見られた児童の変容 ～ 研究の反省より

- ・自分の考えだけでなく、友達の考えを聞いて更に想像を広げていくようになった。
- ・友達の発表をよく聞くようになった。
- ・授業内で児童から「付箋を使って友達の考えをみたい」「みんなの考えが知りたい」など、友達の考えを意識するようになり、そこから考えを深めようとする態度が見られた。
- ・はじめの読取りより、友達の考えを知ることにより別の読取り方を知り、深い読取りになった子もいたと思います。ペア学習→グループ思考→全体思考がよかったと思います。
- ・研究のまとめに示したように、授業の中で児童が自分達でお互いの考えを深め合う姿が見られた点。
- ・級友の発表を聞くことによって、自分が考えてなかったことに気付いたり、話し合う中で考えが深まったことが分かり、他児童の発表を最後までよく聞くようになった。
- ・理由を明確にすることを意識して発表するようになった。
- ・自分の考えを持ち、表現することに意欲的が見られるようになった。
- ・全体交流で、自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりして考えを深めることに進歩が見られた。
- ・話し合うためのスキルが向上した。

2 成果と課題

(1) 成果

①「協働的な学習」の深化

昨年度より「互いに深め合う協働的な学習」へと研究の方向性をより具体的に示し授業研究を行ってきたが、今年度はさらに研究教科を国語科に絞った。そのことにより、互いに深め合う場面での指導を意識して行うことができるようになったと考える。

まず、国語科においてどのような協働的な学習を行うことが有効であるかについて研究を深めることができた。物語文や説明文など、多様な教材を用いて授業が行われた。単元の中ごろの段階では、書いてある事実を整理するために協働的な学習が多く行われていた。終末の段階では、協働的な学習によって単元を通して学んだこと、考えたことを整理し、共有することができた。感想を共有する際も有効であった。また、各時間の中で継続して協働的な学習に取り組むことで児童の習熟度が上がり、より意見の交流を深めることができるということも明らかになった。

次に協働的な学習の形態について研究を深めた。ペア学習からグループ学習、そして全体での意見交流という流れで学習を進めた学級が多く、個の考えが少しずつ全体へと伝わり、比較・検討を行うことで、より高次の考えへと発展する様子を見ることができた。また、一斉指導の中で交流を行うことで協働的な学習を深める授業も行われ、様々な協働的な学習の形態を明らかにすることができたと考える。

最後に、具体的な手だてについてである。各学年とも発達段階に合わせて、様々な手だてをとり、協働的な学習の深化に努めた。(下表参照)

表 協働的な学習を深めるために行われた手だて一覧

学年	有効だった手だて
1年	・ペア学習から全体発表へ
2年	・グループ活動から全体発表へ
3年	・意図的なグループ編成(着目点の似ている児童) ・全体の中での意見交流
4年	・付箋を活用したワークシートの工夫 ・付箋を活用した考えの集約
5年	・付箋を活用した考えの集約 ・ジグソー学習
6年	・付箋を活用した考えの集約 ・協働する姿をイメージさせるための掲示物

付箋やワークシートの工夫、ジグソー学習など、考えを整理するためのツールを活用した授業も多く見られた。これらの学習ツールを活用することは、協働的な学びを活性化させるために有効であった。これらの手だてをとることで、児童の変容も多く見られた。

- ・友達の発表を聞くようになった。
- ・友達の考えを意識するようになった。
- ・他の意見に気付くことで自分の考えを更に深めることができるようになった。
- ・自分の考えを持ち、表現することに意欲的になった。
- ・話合いのスキルが向上した。 等

以上のことから、今年度は「国語科を通じた協働的な学習」へとより意識して授業づくりを行い、「互いに深め合う」ための手だてをとることで成果を得ることができた研究であったと考える。

②国語科の指導の在り方

昨年度までは複数教科で研究授業を行ってきたが、今年度は国語科に絞って実践を積み重ねてきた。協働的な学習について考える以前の問題として、国語科としての目標や単元のねらいを達成させることが大前提であるといえる。今年度は共通の国語科という視点を持ったことで、研究の視点だけではなく、国語科の指導の在り方そのものについても理解を深めることができた。研究授業の際には、指導助言の先生方をお招きし、国語科の指導について御指導いただいた。諸先生方の御指導で、研究の視点だけでなく、国語科の根幹に関わる部分についても理解を深めることができたことも大きな成果である。

また、教科を絞ったことで学年間の指導方法の関連が見えるようになり、発達段階に応じた系統的な指導の在り方についても考えることができた。1回目と2回目の児童の変容や学年ごとの成長も昨年度より見えやすくなったと言える。

③研究授業のシステム化

今年度も研究授業のシステム化に取り組んだ。年度当初に研究授業の年間計画を立て、見通しを持って研究授業に臨んだ。研究授業当日は業間休みに指導助言をいただき、放課後は30分の検討会、そして次回研究授業の模擬授業を30分行った。時間をあらかじめ設定し、話合いの観点を明確にすることで、効率よく行うことができた。また、模擬授業前に学年部による指導案検討会を実施した。単元・教材などの妥当性や提案の具体性などについての話合いを持つことにより、多くの授業でテーマに迫る内容の提案ができた。来年度は模擬授業前に教科書のコピーを配布することで、それぞれが教材に対する理解を事前に深め、より話合いの質を高めていきたい。

(2) 課題

①国語科と協働的な学習の関連について

研究テーマに沿った実践を行おうとするあまり、国語科本来の目標が達成されたとはいえない実践も見られた。協働的な学習はすべての単元のすべての学習場面で有効であるとは言えない。どのような単元で、どのような段階で、どのような協働学習を取り入れるか、十分に吟味する必要がある。来年度は国語科のねらいを達成させることを第一に考え、その上で有効な協働学習を取り入れるにはどうしたよいかという視点を大切にしていける必要がある。

②「協働的な学習」の捉え

昨年度に引き続き今年度も「協働的な学習」というキーワードを取り入れて研究を進めてきた。各学年とも協働的な学習とはどのようなものなのかを探りながら1年間の実践を行ってきた。その結果、児童の変容も多く見られるようになってきた。単なるペア学習やグループ学習である「共同的な学習」から、学び合い、高めあえる「協働的な学習」へと指導の内容も高めることができるようになったといえる。しかし今年度の実践に満足することなく、本来の意味での「協働的な学習」とは何か、どのような理想の児童像を思い描くべきか、今後も議論を続ける必要がある。そのためにも先行研究などの事例を収集し、本校としての国語科を通じた「協働的な学習」の捉えを明らかにしていきたい。さらに新しく文部科学省から示されている「主体的・対話的で深い学び」とも関連を図りながら研究を深めていきたい。